

コンサベーション心理学の可能性—自然を思いやる心を育てるには—

大島 尚（東洋大学社会学部）

●司会（大島）

TIEPh ですが、正式名称は東洋大学エコ・フィロソフィ学際研究イニシアティブという名前の研究センターです。その中で、私どもは第二ユニットという形で、社会心理学の立場から環境問題を考えようということで研究をしているグループであります。

今日は、社会心理学の立場からということなのですが、最近このようなコンサベーション・サイコロジーという本を、これはエディターですけれども、そしてこちらは共著ですけれども、こういった分野でご活躍の Susan Clayton 先生をお迎えしてお話を伺おうということにいたしました。

コンサベーション・サイコロジーをそのままタイトルでは「コンサベーション心理学」としたのですけれども、コンサベーションという言葉について、実は 5 年前に私どもがシンポジウムを行った時に、コンサベーションとプリザベーションの違いというようなこともテーマになったことがございました。その時には、ナショナル・フォレストというものと、ナショナル・パークというものは違うのだという、ナショナル・パークというのは、一切人間が手をつけなくて保つべき場所で、それに対してナショナル・フォレストというのは、人間がそれを利用して自然を守ると同時に、人間もその自然から影響を受けるといいますか、健康のために自然を利用する、そういう考え方なのということでした。お話しいただいたのは環境 NGO のリーダーの方だったのですけれども、ナショナル・フォレストの中でいかにして森を守っていくのかという活動をされている方だったのです。その時にも議論になったのですが、日本語では「環境保護」というだけであって、厳密に分けるとときには環境保全、コンサベーションを保全と訳す場合があるのですが、あまり一般的な言葉ではなくて、環境保護と一括りにしているわけです。この背後にもしかしたら、文化的な違いがあるかもしれないということも議論になりました。自然と人間との関係についてですね、西洋的な考え方だと、自然と人間をそれぞれ独自のものとしてみなすけれども、東洋の場合には、それを一体として考えるというそういった違いが関係するかもしれないという議論もありました。

今日はそのような議論ではないのですけれども、コンサベーション・サイコロジーという言葉は、まだ日本ではあまり普及していないものですから、そのまま「コンサベーション心理学」と訳しました。先ほどの例でいえば人間と自然とが関わるという、自然をそのままにしておく、手を触れないという意味ではなく、人間と自然との関わりの中でより良い暮らしや生活などを考えていこうとするのだと思います。そういう意味で、今日コンサベーション・サイコロジーの第一人者である Clayton 先生をお呼びできたことは、大変光栄に思っていますし、大変楽しみにしております。

それから、講演の後に私ども東洋大学社会学部の教授でいらっしゃる堀毛一也先生にコメントを、

堀毛先生はポジティブ心理学の立場から well-being、幸福な生活といったものをずっとご研究なさっていて、最近はサステナブル well-being という分野について色々と研究を進めていらっしゃいます。その様な立場からコメントをいただいて、質疑応答へのきっかけになればというふうに思っております。

最初に私、自己紹介を忘れてしまったのですが、東洋大学社会学部の大島と申します。本日司会をやらさせていただきますのでよろしくお願いいたします。

それでは、時間も押してまいりますので、早速 Clayton 先生にお話しいただきたいと思います。Clayton 先生、よろしくお願いいたします。

●Susan Clayton

みなさん、こんにちは。このように来日の機会をいただきありがとうございます。申し訳なく思っているのは、日本語で話せないということです。英語で直に聞いていただくか、あるいは通訳の方を聞いていただくかしきありません。私は、今日は、人と自然界との繋がり、関係性ということについてお話しする予定です。

私が認識しているのは、自然の環境というものは人の行動により脅かされています。ですので、ますますその健全性を失っているわけです。これは私たちの社会学という立場におきましては、非常に懸念すべきことです。私たちは、その人の行動を理解し、そしてそれに影響を及ぼすという機会が社会学にはあります。また、これは重要なテーマでもあります。というのは、環境というものは非常に大きな価値があります。私たちは自然が無ければ生存し、また人として繁栄することもできませんし、私たちの健康にも大きな影響があるということです。これについては、また後ほどお話を聞いていただけたと思います。また、経済的生産性にも寄与しておりまして、私たちの経済の機能というのは、例えば花粉、それから空気や水の浄化といったことにおいて、私たちの経済を可能にしているわけですが、自然というのは、それだけ影響するサービスだけでなく、個人的な意義もあると考えるべきです。これは写真からも見てとることが出来ると思います。

人々は、自然が提供してくれているものに価値を見出しているのです。数年前ですが、“Sierra Club”、これは環境保護団体、アメリカに拠点を置く団体なのですが、彼らのクラブのメンバーに対して調査をしました。なぜ自分たちが環境保護主義になったのかということです。そして、その結果をオンラインで用意してあります。その回答を見るにつけ、いかにこのコメントが個人的なものであるかということに驚きました。彼らは例えば、自然を保護しなければいけないのは、私たちが生存するためには必要であるということであるとか、そういうことではなく、地球を守るという私のモチベーションを保つためといったような、かなり利己的な回答があつたりしました。また、野外に出ると、自然に触れていると、他では感じられないほどに自分らしくなれると感じるというコメントもありました。また、自然は人の存在の中核と結びついているというようなコメントも見られました。

ということで、私も自問自答しました。私たちのアイデンティティに自然は関連があるのか、もしそうであれば何故か、ということです。私たちは、このアイデンティティの定義をするとすれば、予測的な自己、および自己と世界との関係性についての意識であるということです。あるいは、アイデンティティは私たちを記述するのですが、私たちは、そのある文脈を私たちに提供することにより、私たちの居場所を提供してくれるわけです。一人一人は複数のアイデンティティを持ち得ると考えます。状況に応じてこのアイデンティティが異なります。ですので、自分のアイデンティティというのは、家族のメンバーであったり、これは一番重要かもしれませんが、あるいは別の状況では仕事人として、あるいは国の国民としてのアイデンティティを持っていたりするわけです。また、人はどのアイデンティティが自分にとって重要なのかということが個々様々です。

ですので、私はいろいろと聞いてみました。私たちはその環境に介入するようなアイデンティティをいかに構築するのか、私たちのそういったアイデンティティの出どころはどこからくるのかということを考えるに至ったわけです。私たちがアイデンティティを構築するときには、私たちは実質一連の記憶、私たちが何をやったのか、経験したのかというところからアイデンティティを構築すると考えられます。そして、その私たちが最も印象に残った、記憶に残る経験というのがやはり生き生きと記憶として残り、感覚的な印象に感覚が強くなります。例えば、家族との思い出だったり、あるいは自然で過ごした時間であったり、成人における調査におきましては、人々がその幼少のころに費やした自然における体験というものを、そのほかの体験に比べてより強く記憶している、報告しうるといわれているわけです。ちなみにこの写真は私と息子です。そして、記憶が構築されるのですが、私たちは時間をかけてアイデンティティを構築するわけです。調査によりますと、人が自分たちに対する考え方を自己内省をするときに、私たちの価値あるいは目標を考えたいときに、どこに行くのかということになりまして、やはり自然の中に身を置きたいと考える人が多いということです。

私は、自分の生徒を森に連れて行きました。そして、自分に対する自分自身の考え方をどういう風に自然が影響をもたらしてくれているのか聞いてみました。自然は私を私らしくさせてくれるというような回答があったり、あるいは自分が自立していると感じる、私らしくなれる、自分らしくなれる、人らしく感じられるとありますので、自然に対して自分が何なのかということを考える能力、また機会を提供してくれるものだと考えることができます。しかしながら、アイデンティティというのは、私たちが記述するだけではなく、私たちの居場所を提供してくれる、その他の人や物と私たちはつながることによってそうさせてくれるのです。

また、人は野外に出たときに、自然との強いつながりを感じることができると報告しがちです。私の生徒からの更なるコメントにあります、帰属感を感じることができる、あるいは私はその他全てのものの一部と自分を感じることができる、生命そしてコミュニティが互いに結びついていて自分がその一部と感じることができるとか、Sierra Clubの調査におきましては、他にも似たようなコメント

が出ています。私たち全員の中の何か奥深くにあるものというのが自然界と結びついていて、自分はその自然界と強く結びついていると感じるということです。

ということで、人によって繋がりというものの差があるのですが、その研究をしました。環境・アイデンティティ評価尺度、EID というものを開発するに至りました。この中には、様々な要素が含まれております。例えば、自然へのありがたみや自然への関与の視点、また環境保護的な行動、そして自己概念といった要素が含まれた評価尺度になっています。これらは、自然に非常に関連性がある因子としてあがっています。

また、この尺度を使った研究によると、信頼性を問う形で環境アイデンティティというのは保護的な行動、あるいは環境保護に関する懸念、それから環境、動物種の保護に対する支援強化、それから動物と自分が類似しているということの共感性というものを、この環境アイデンティティが強化する可能性があることが示唆されています。これは理論的に考えて非常に興味深い点だと思います。これはやはり人生的な観点でも大事だと思います。アイデンティティというのは私たちにとって非常に重要であるからです。アイデンティティというのは、私たちの幸福に影響を及ぼし、そして周りの出来事に対する払うべき注意、理解、そしてそれに基づく行動ということに関連しております。これらについて一つ一つお話したいと思います。

まず、福祉あるいは幸福についてなのですが、私たちは強い環境アイデンティティを有していたのならば、その環境への影響が自分自身のアイデンティティにも影響を及ぼします。ある場所が破壊されたり、あるいはそういった場所に自分につながりを感じた場合には、自分自身のアイデンティティが損なわれたような感じがします。ラブキャナル、これはアメリカにおける地域なのですが、ここは毒性の散布によって激しく汚染された地域です。ラブキャナル出身ですといったような場合には、「ああ、あの汚染された地域ね」といわれ、福島も同様だと考えます。ということは、自分の意識というものが、何らかの形で損なわれたという風に感じるわけです。

環境は損なわれるだけではなくて、失ってしまう場合もあります。例えば干ばつや洪水によって住む場所を追われる人もいます。そして自分たちが親しんできた場所を離れなければいけない、それをコミュニティ全体で離れてコミュニティが戻れないということもあります。そして、そのようなことが起これば、全くつながりのない土地に移動して、そのようなアイデンティティがその土地には感じられない、そういった繋がりを新しい土地に感じられないという風に思わざるを得ない場合もあります。

また、その場所そのものが損なわれて傷つけられてしまった場合、その集団のリーダーに対しての信頼を、そこに住んでいる人が失う場合があります。例えば、そのような被害があった場所をリーダーが適切に守ることができなかつたり、またその損失を回復できなかつたりした場合、その集団に属する人たちがグループのアイデンティティに対しての価値を低下させてしまうことがあります。数年前に、ハリケーン・カトリーナの被害がありましたが、当時政府がそれにうまく対応できなかったとい

うことがあります。その結果として、国に対して、またアメリカ市民としての価値を住んでいた人たちが持てなくなった、持っていた価値を低下させてしまったというような事情がありました。しかし、こういった環境アイデンティティというのが、回復力の非常に強力な源という話にもなります。

これは堀毛先生の方から、あとからお話があると思いますけれども、このような状況にあった場合、皆さんがこの状況の中で自分たちは強くそのグループの一員であると感じて、そしてそれがひいては自然への繋がりや主観的な幸福の結びつきにもなると考えられます。

なぜアイデンティティが重要かということの二点目なのですが、これはわれわれの考え方、何か起こったことに対する対応の仕方、解釈に対して、これが影響を与えるからです。世界では色々なことが起こっていて、私たちはそれに注意を払って生きてきていますが、その中でも自分に一番関係のあるものに注意を向けるということをしています。例えば、行ったことのない町で起こった出来事に対してはあまり関心を払わないと思いますが、もし今までに行ったことのある、住んだことのあるということであればその町の出来事により関心を持つと思います。また、われわれのアイデンティティを守ることに対する動機づけということもあります。その情報やトピックがもし、自分たちのそういったアイデンティティに対して悪い影響を与えそうだと感じた時には、それをあえて無視するということがあります。

アメリカでは現在、環境に対しての関心が、自分の支持する政党と強く結びつけて考えられるようになっています。保守派の政党の場合は、民主党に比べて、つまりリベラルな政党に比べて環境への関心が低いといわれています。調査によりますと、支持政党はどこかということが気候変動が実際に起きているのかという認識にも非常に大きな影響を及ぼす要因の一つだといわれています。これは教育のレベルには関係なくそうだといわれています。

ここのトピック、さらに深く考察したいと思います。私がオンラインでの調査を行いまして、378名のアメリカ人の回答者を得ました。この人たちに、気候変動について尋ねてみました。それから、様々なアイデンティティに関わる質問も同時に尋ねました。この結果によりますと、どの位の害が気候変動によってもたらされるかという質問については、この環境アイデンティティ、支持政党、性別ということで考えますと、このような結果が出ました。

例えば性別ですと、女性の方が、問題意識が高いということが出ました。また、このような気候変動に対応するためにどのくらいの責任がわれわれにはあるのかということですが、それはやはり性別だとか、支持政党の因子というものが非常に影響を及ぼしているということがわかりました。また、環境アイデンティティ、それから性別というものについては、更にこの気候変動に対しての感情的な意見というものを持つという因子になるということがわかりました。例えば女性の方が、怒りであるとか悲しみ、心配という感情を、気候変動に対して持っているということがわかりました。このような調査結果から、グループアイデンティティというものをベースにして、この環境についての答えを

予測することができるということがわかってきました。その環境アイデンティティももちろんそうですし、そして支持政党がどこかということについては、その政党を支持する他のメンバーたちと同調した意見を出す、ということを示唆しました。

それから性別ですけれども、これも回答に影響を及ぼします。ジェンダー規範によって、女性の方がより共感的な答えをするように、という方向に仕向けられます。つまり、もっとこの回答において、この気候変動ということについての答えにおいても、より感情的な答えを出すという傾向が見られました。

それから第三番目の理由として、なぜアイデンティティが重要なのかということについては、これは最も実用的なことに関連した答えだと思うのですけれども、それは動機づけと行動です。われわれがある一定の行動をするというのは、他の人によく見せたいと、そういったことがあると思います。

これはですね、私の家の近所にあるショッピングセンターに立っていた旗なのですけれども、「我買う、ショッピングする、故に我あり」と書いてあります。つまり、私たちが何を買うかによって、私はどのような人間かと示されるということを書いているのだと思います。

それから、これは数年前の調査なのですが、プリウスを所有している人たちを対象にした調査がありました。つまり、この電気を使う自動車を買った最初の購入層の人たち、こういった人たちは何故環境に影響を及ぼさないとされている自動車を買ったのかといいますが、一番多かった答えが、プリウスを持っていることで、あの人は環境に注意している人なのだなと見てもらいたいからというものでした。

それから、アイデンティティによって何かの里親になるという行為も促されます。例えば、本当に誰かの子の里親になるということは、その子どもは家族の一員になるわけです。ですが、この里親になるということを、物を対象にして言うこともできます。アメリカでは、“Adopt-a-Highway”というプログラムがあります。これは、グループなどの人たちが、道路のある一定の区間を自分たちのものにするという感じですね。里親になるという感じです。ここの区間だけは、ごみを捨てたり、捨ててあればそこを掃除したりと、そういったことをしてきれいに保ちましょうという運動なのですが、これは非常にうまくいっています。この里親になっているということから、ここを綺麗にしようという意識が生まれるのです。

このようなアイデンティティがわれわれの考えや物事、環境問題へ影響を与えるということから、ではそもそも環境アイデンティティというものはどこから来ているのかということに次に考えたいと思います。ここでは三点お話をします。個人的な体験・経験、文化と共有の遺産、それから社会的な経験です。他人と共有する経験です。

一つ明確に分かっていることというのは、個人的な自然との体験的なものがどんどん減ってきているということです。それは実際、都市に住んでいる人たちがどんどん増えていて、自然に日常的に接している人の数が減っているということからもいえると思うのですが、そういう個人的な、直接

的な関係という経験だけではなく、間接的な経験も減ってきています。

一つすごく興味深い研究があります。これはディズニーの映画を対象に調査したもののなのですが、ディズニーの映画過去 70 年のものを全部を観て比較してみました。これは初期のころの「バンビ」ですね。皆さん多くの方ご覧になったことがあると思います。最新のものと「カーズ」のような、こういった映画がディズニーから出ていますが、結果としてわかったことは、自然を題材にとったものというのがどんどん減ってきているということです。時を経るごとにディズニーでこういった自然を取り扱っている映画が減っているわけです。自然がこのように使われていたとしても、多様な生物を扱うということは本当になくなってしまったのです。

それから、文化も環境アイデンティティに影響を及ぼします。私たちの社会化のプロセスにおいて、自然に対する態度というものを学ぶわけですが、自然は重要で価値のあるもので、敬意を払わなければならないものであると教えられるわけです。例えば、皆さんが国としてそのようなアイデンティティをもっている市民であれば、皆さんの個人の環境アイデンティティも強くなるはずですが、私が本当にそうだと納得したのは、ある国、これはトルコと中国ですが、このようなことを実感しました。ですが、アメリカではそういうことは残念ながらありませんでした。これは中国の学校に掲げてあったポスターです。教育の一環として、自然を尊び、守りましょうということを掲げています。

それから最後になりますが、社会的な経験です。これも環境アイデンティティを育てます。この社会的な体験というのは、他者とのやり取り、関わりですね、その中には自然も入ってきます。それを経験の一環として経験していく中で、自然に対する態度が養われるというものです。そういったことが行われる一つの場所として動物園があります。これは動物園水族館協会というところが使命として掲げているものなのですが、これは人と動物とを結びつけるということを謳っています。そしてそれを動物、自然両方を尊いものと敬意を払いながらしましょうという風に言っています。そして、こちらにある機関紙なのですが、**“CONNECT”**とタイトルがついています。まさに彼らが行っているようなことを強調しているような内容になっています。

動物園は潜在的に環境アイデンティティを調整する余地があります。というのは、人々の知識を膨張させます。そして多くの環境についての情報を人々に提供します。そして、バイアスのかかっている情報源であると認識されることがこの場合重要になってまいります。人々は、動物園というのは自然を保護しようとしている場所だという風に認識します。確かに動物園によっては、そういったことに長けていない動物園もあるのですが、尊重の価値のある動物園においては、少なくとも、そのようにみられてもおかしくないところが多々あるわけです。人々はグループをなして動物園を訪問します。家族、あるいは学校の遠足といった形で動物園を訪問します。動物園を訪れると行われる会話により、共有できるような価値観が生まれたり、規範が生まれたり、思い出を作ることができます。規範というのは、自然の価値を認識するという規範です。

もちろん動物園においては、人々が生き生きとした体験を持つことができます。そして、それによって共感できるような感情的な体験をもたらせます。というのは、自分たちにとって重要と思われるような人たちとグループをなして訪問することが多いわけです。ですので、そこで生まれる記憶というのは非常に重要で、また、記憶に残りやすいということにもなります。そして人々は動物に対する繋がりを感ずることができるようになります。

動物園では、このような企画を奨励しています。人と動物との比較です。ご覧の通り人の手、そして霊長類の手があります。いかに自分の手がそういった霊長類の手と類似しているのかということ比べましようということを奨励しているわけです。これは、同様のことです。他の動物の足跡、そして人の足跡がどう類似していますか、違いますかということです。この看板によって、私たちのようにゴリラも指紋がある、そして指紋というのは個人固有のもので、これによって動物とわれわれは共通の部分をよく持っているのだなという感覚が生まれるわけです。動物園を訪問することによって、人々はコミュニケーションを通じて自然の価値についての社会的規範を調整することができます。この写真のように、お父さんがあちらを見なさいということに対してきちんとそこに注意を向けているということがわかりますね。

ということで、さらに厳密に動物園でどのような光景が見られるのか調査を行いました。環境アイデンティティを調整しうるような所見が見られるのだろうかということです。私はある研究を行いました。動物園に訪れる人たちが、どのような会話を行っているのかということを実に観察したものです。動物に人々がいかにつながりを持っているのかという証拠を探ろうとしたわけです。これらの抽出したコメントの25%は、動物は何を考えているのかについて推測したものでした。例えば、ヒヒは悲しそうに見えるだとか、アシカは餌が欲しいと思っているなどです。そして15%のコメントは、何らかの動物との関わりを持つことを試みたものでした。ということは、ものとして動物を観察するのではなく、別の一つの個として見ているということになるわけです。そして、4%の人たちが、動物がとった行動やしぐさを真似ました。6%の人が人と動物との間の明示的な比較を行うようなものでした。もちろん、私の一番のお気に入りというのは、ゴリラがお父さんに似ているねというコメントです。そして4%の人が、動物の立場にたって発言しています。動物が何を表現したがつているのかということ、自分たちが代弁するようなコメントです。

ということで、どうやら動物園というところは人々が動物と近く感じ、そして動物に対して持っている共通項を探り、発見する機会を提供しているわけです。そして、このアイデンティティを共有しているという感覚こそが、人が動物に対して共感を持つことができ、動物が何を経験し感じているのかということを考える機会になるわけです。

一般的には、動物園を頻繁に訪問するということが可能にしている訪問客は、環境アイデンティティが高い傾向にあるということがわかっており、そして、環境問題に関する問題意識も相対的に高いことがわかっています。例えば、最近私が関わった研究におきまして、動物園の訪問客とその他一

般の国民をアメリカで比較した調査があります。気候変動に対する反応の違いを調査したものになっています。これは、母集団は大きく 3,500 人です。エール大学のある研究グループが 6 個のグループに分類しています。つまり、この気候変動に対する懸念レベルです。最も高いのが左端のもので、最も低い水準のものが右端のもので比例しています。ご覧の通り、大半の一般の人たちは、動物園の訪問客に比べて気候変動に対して関心がない、あるいは否定している傾向にあります。そして動物園を訪問する人たちが、気候変動に対する問題意識そして懸念のレベルが高いという調査結果が出ています。これらの結果が重要だということの一つに、動物園は多くの人が訪問する場所だということがあります。ということは、人々に対して影響を及ぼし、他の人にリーチアウトする機会を提供する場であるということです。そして疑問は、動物園訪問によって奨励される環境アイデンティティを活用して動物の汚染保護を促進することができないのかという課題です。

私は今、とある中国に関連するプロジェクトに関わっております。これを検討できるのか可能性を探る調査研究です。皆さんご存知かもしれませんが、動物種が絶滅を危惧されるのは生息地が失われるからではなく、人による動物種の消費というのが一つの大きな要因となっているのです。これらの動物種から作られた製品の人による消費なども要因の一つになっています。象牙だとかそういったものです。中国におきましては、伝統的な漢方薬というのは、野生生物種を用いた漢方も多く使われております。しかしながら、こういった野生動物の保護に関しての懸念のレベル、あるいは問題意識というのは全然高くないのです。

そうはいっても中国固有の野生動物というのは、中国国民には非常に多大な価値が見出されており、重要視されています。中国を訪問するとわかるのですが、あるいはその経験がある方は分かると思うのですが、ぜひ見ていただきたいと思うのですが、このパンダの写真というのが、ほとんど考える製品、看板のありとあらゆるところに見受けられるということにお気づきになったと思います。それだけ愛されているのですね。

ということで、やはりこの動物種に関する保護、懸念のレベルというものをいかに向上できないかということを検討したかったのです。二つの側面があります。一つは社会規範、これに注目しております。他の人たちから資料をいただき、それからどういう風に行動し、考えるのかということが決まるわけですが、この社会規範におきまして環境保護的な行動が促進されるという意味においては、この社会的規範は非常に重要な要素です。また、この保全の問題というのを、個々人にとって関連性の深い因子にしたいと考えました。

ということで、このプロジェクトが 3 つの段階にまたがって実施されております。まず、第一段階では、背景の調査です。環境問題について人々が何を知って、そして何を考えているのかということです。そして情報ベースのプログラムが企画されました。動物園に展示するという形です。生徒と動物園、そして生徒における情報を展示するというを行いました。これは最近展示がなされたもの

です。そして私たちの今年の夏の目標というのは、この展示が人々に対してどのような効果をもたらしたのかということの検討です。

ということで、いろいろなことを検討しております。これらがどれくらいの重要性を持つのか、そして人々が持てる環境の懸念の水準にそれぞれの因子がどの程度関係があるのかということです。

二つ目の検討の対象は環境アイデンティティ、動物に対する結びつきの感覚です。これはペットの問題なのですが、ナショナル・アイデンティティ、これは動物に直接関係はないのですが、これも検討しています。このナショナル・アイデンティティに関しては、自分の国についていかに誇りを持てるのか、そしてどのくらい重要だと考えられているのかということです。また、自分たち自身が野生動物たちの保護について効力を持っているのかどうかという感覚です。以前の調査では、この自己効力というのは行動するかどうかの予測因子になっています。自分が違いをもたらすことができるのかどうかということが、非常に重要な行動の予測因子になっているという調査結果も出ているわけです。

そちらの調査の結果ですが、このような様々な変数が環境に対しての関心に影響があるということがわかりました。環境アイデンティティが、その中でも一番大きな影響があるということがわかりました。また、その国家としてのアイデンティティということもあまり高いレベルではありませんが、野生動物の取引に関してはある一定の関連があるという結果が出ました。ですので、われわれが教育の資料を編纂する際には、まず知識を高めることを考えなければなりません。

例えば、絶滅の危機に瀕している種によって作られたものは買ってはいけないだとか、そういった法律、規範に関するもの、またそのようなことに対してどういったアクションを取ればいいのかといったことを教えるようなものです。それから、行為に対してどのようなコンテキストがあるのかということも教えてあげなければいけません。その際には、動物との繋がりを強調したり、または社会規範として動物を守るということが存在しているのだということを強調したり、そして国家としての誇りをもって、絶滅の危機に瀕している種を守らなければいけないといったことも教えなければいけません。

実際にその掲示をした二つの看板ですね、これは複数の言語で書かれています。こういったものがあります。ここのところでは、何と書いてあるかといいますと、「サインをして約束をしましょう」と書いてあります。つまり、人々にコミットメントを求めているわけです。コミットメントをして、自分個人のアイデンティティもこれに合わせるようにそういったアクションを取りましょうといったことを求めています。それから、ここでは色々なところで各所にサインをするボードが設けられています。動物保護のためにすぐに行動に移せるようなところに置かれているわけです。また、それぞれの個別の種に対しての掲示もあります。これは虎についてのものです。これを使うことによって、虎との結びつきを促しています。「ここには私の話があります」と、これは虎が話すようなそういった形式で書かれているわけです。また、最後のところに、この状況から助けてもらえるようにするにはあなたは何かができますかと書いてあります。これによって、これまでと何か違う変化が生まれるこ

とを望んでいるわけです。これを、持続可能性を促進するために更に幅広く捉えてみてはいかがでしょうか。環境を保護するという際にはまず私が考えますのは、そういった環境問題に対して個人としての関わり、それを確立しなくてはならないと思います。

それから、環境アイデンティティを一人一人の中に持てるように、そういったことをなさなくてはならないと思います。では、それをどのようにすればよいのか。これは簡単にできるというわけではありませんが、まずはその個人の体験、それをまず強化していく必要があると思います。何らかの方法で、自然で過ごす時間、それを持てるようにするということです。また、文化それから遺産が自然保護と結びつくような方法を見つけることも必要です。一つの方法としては、例えば皆さんが住んでいるところに関しての教育を施し、それによってそのある特定の場所と、その文化が結びついているのだということを教えてあげるといったことも一つあると思います。

そして最後に、社会的な経験を持つ機会を与える、そして自然の価値というものを認識できるようにするということです。一つの方法としては、建物であるとか、研究所であるとか、都市といったところをデザインする際に、ある場所を設けて、自然との間においての社会的な経験を共有できる場所を持たせるということです。例えば都市の中でも美しい公園などの場所があれば、そういった経験ができると思います。

以上です。どうもみなさんご清聴ありがとうございました。質問やコメントがありましたら、私の方にぜひまたコンタクトをお取りいただければと思います。どうもありがとうございました。

●司会（大島）

どうもありがとうございました。今日お配りしたプリントは白黒に変換したのですが、なぜか少し文字が落ちてしまったところがありまして、大変申し訳ありませんでした。

もう一度確認いたしますと、2 ページ目の真ん中の右側ですね。“Environment Identity (EID) Scale”と書いてあります。一番大事なタイトルが抜けており失礼いたしました。あと 2 か所あるのですが、6 ページの真ん中の左側、タイトルが“The potential of zoos”となり、これが消えていました。それから、8 ページのやはり真ん中の右側、“Project description”という、プロジェクトの概要ですね、これが抜けていました。大変失礼いたしました。

この後に、堀毛先生からコメントをいただきますが、今の段階で少しここだけ確認したいということがございましたら、どうぞ、日本語でも全部同時通訳していただきますので、気楽にお願いいたします。いかがでしょうか。よろしいですか。それでは堀毛先生の方からお願いいたします。

●コメンテーター（堀毛）

英語で話をするべきところですが、失礼して日本語でコメントを述べさせていただきます。

まず、基本的に幅広く、そして豊かな内容のお話でした。私にそういうお話についてコメントをつけるような知識も力量もございませんので、そこでどうしようかなと考えたのですが、自分の研究について話をしながら、今日の話と関連付けて先生のコメントをいただければありがたいと思います。

まず、今日のご講義の基本的な関心として、自然保護的な態度をいかに育てるか。そのために心理学にどのような貢献が出来るか。それを考えるに当たっては、個人の環境アイデンティティがとても重要であると。私もその点に関しては、非常に強く同意いたします。若干私の個人的な関心について話をさせていただきますと、前の大学で、サステナビリティ研究が行われておりまして、教育も行われていたのですが、特に理科系を中心とするものでありまして、そこでは私の専門はパーソナリティ心理学、社会心理学、ポジティブ心理学といった個人差ですね、それを非常に強調する考え方だったものですから、そういった心理学的な視点が欠落しているということを強く感じました。これは先生のご指摘の中にもありましたけれども、そういった自然・環境保護活動への関与、というようなものを考えるに当たっては、個人の視点というものを重視することがとても大事だろうと。そして、その関与の低さを改善するやり方は何かないだろうかというのが、私の研究テーマになりました。そこで、私はポジティブ心理学に関心があったものですから、ここ 5 年ほどの科研費の研究として、ポジティブ心理学を背景とするようなサステナブルな心性の発見、そしてそれを促進するようなツールの開発といった様なことについての研究を行っているわけです。

これだけ英語のスライドになっていて恐縮ですが、海外の学会で発表した時のスライドなのですが、そのサステナビリティに関しては、ここに示したような Gifford、Kazdin、そして先生の研究を挙げさせていただいていますが、サステナビリティ研究系の心理学というようなものが非常に大事であるということが、特に最近の環境心理学の中では主張されているように思います。つまり研究の関心が少しシフトしてきたという風に私自身は感じているわけです。

こうした動きは、心理学ばかりではなくて、例えばこれは昨年環境白書の内容ですけれども、日本の環境白書ですが、持続可能な社会に向けた一人一人の取り組み方の重要性ということが強調されています。そこでは、この図にあるように、こちらが平成 9 年のデータで、こちらが平成 13 年のデータですが、環境保全に重要な役割を担うものとして、何がその対象になるのかということで、トップに来ているのがこの「国民」という回答です。しかもその比率が 31%の解答が 44%まで増えていきます。つまり、国民の一人一人が環境保全に対して重要な役割を持つということが、こうしたデータの中にもあらわれてきているということになります。しかし、同時に指摘されていることには、これは環境心理学に関心のある方は皆悩んでいらっしゃると思いますが、環境問題に対する意識と、それと行動の間に隔たりがあるということですね。このように、意識としては高いものがあると、ある程度しっかりしていると。しかし、それがビヘイビアに結びつかないという点が、やはり今日のお話の中にもありましたけれども、大きな課題になっているという風に思います。

政府は、サステナブルな社会を目指した環境教育だとか、環境学習というようなものの指針を立

てておりまして、そこでは人材育成、つまり環境教育を担う人を育成すること、そして環境プログラムを整備すること。環境問題に関する情報を提起する、それを幅広く行うこと。そして、今日の話にもありましたが、場や機会を作ることといった様なことを環境教育、環境学習の柱だという風に言っております。ただ、その内容を見ても、どうしても心理学的な視点というようなものの欠落、つまり非常にグローバルな側面からこうしなくてはならないというようなことは言われているわけですが、それを個人個人にどう落とししていくのかというような視点が非常に欠落しているように思います。

これは個人個人がやるべきことで、冷房とか暖房の温度調整をするということですね、それから車の運転を控える、アイドリングストップ、そしてシャワーの量を減らす、洗濯にお風呂のお湯を使うなどなどですね。そういうことが、個人が出来ることとして挙げられているのですが、実際にはそれらの実践のようなことをやってみると、結構の割合の人達が、日常の環境保全行動はやっている。例えば、ごみの分別です。これは90%以上の人々がそういう分別をやっていると。これはアメリカの方も同じだと思います。それからアイドリングですね、不要なアイドリングをしないと。それから節電とかですね、節水とか、そういったものに関してかなりの高いパーセンテージでイエスなものが出てきています。これは平成9年度も、平成13年度もあまり変わりはありません。

同時に、着目しておきたいのはこの部分です。これは、地域の緑化活動に参加している、グリーン・オブザベーションって言えばいいのですかね、あるいは美化活動に参加している、先ほどHighway運動の話がありました。それから、リサイクル活動、地域の環境保全に関する活動。つまりどういうことかということ、コミュニティに関連するような行動に参加するという比率が非常に低いと。20%を切っている。これが日本の一つの特徴かもしれないという風に思いました。つまり、日本の場合には個人の意識が強いし、そして個人が行う活動というものも行われているけれども、コミュニティとしてみんなで協力するというような側面の活動が非常に低いというようなことがある、これが一つの特徴かなと思います。

そこで、私の研究の目的は、一人一人の行動をより顕著なものに強化する、つまり、活動を良くやっていただくということによって、それを一般的にもっと般化していくというようなプロセスを辿れないか、そしてプロセスの背景にポジティブ心理学的なものが出てこないかということですね。これはご存知かと思いますが、Mischelたちの言っている行動指紋というものの方の考え方です。横軸に色々な環境行動の領域をもってきて縦軸に行動傾向を取ります。そうすると、人によってどこが良くやっている、どこができないというような違いみたいなものがパターンとして出てきます。そのなかで、いわゆる環境教育というものがパターンをそのまま上のほうに上げるということを考えているわけですが、そのきっかけとして、私はこういうことをやってみてはどうかと。このパターンがIndividual differencesになるわけですが、こういう風にこう変えると、あるいはこの人についてはこういう風に変えるという動きですね。つまりその人の持っている強い部分、それをもっと強めて、

そしてそれを行動に結びつけるといったような介入が出来ないだろうか。ポジティブ心理学ではポジティブ・インターベーションという、サイコロジカル・インターベーションということでやっているわけですが、こういうような試みによって環境教育そのものを特に個人のレベルで強めるということが全体的なレベルアップに繋がっていくのではないかと、そのようなことが考えられるのではないかと思います。この点について先生に伺いたいのは、こういう環境アイデンティティの個人差というようなものを把握すると、4つの側面があるとおっしゃいましたが、多分それによって個人差ということは把握することが出来るのだと思うのですが、そういうもののパターン化だとか、プロフィール化だとか、そういったことをやっていращやるのかということのを少し伺ってみたいという風に思いました。

そして、もう一つは今話したように、その良い所を伸ばすというような介入を考えているわけですが、こういう視点みたいなものは環境アイデンティティ研究や教育でも可能だろうか、その足りないところを補うというような教育に比べて、どちらが効果的なのだろうか、そういったことについて何か考えをお持ちでしたら教えていただければと思いました。

さて、もう一つ私の研究について、どうも皆さんには余計なことばかりで申し訳ないと思うのですが、サステナブルな心性というようなものを個人差として把握することが出来るのではないかと考えています。それで、これについて色々な研究をやってみたのですが、最近作っている環境改訂版の尺度の中身というのがこのような内容から形成されるものです。一部は多分、環境アイデンティティの話と関わってくると思うのですが、この私が作った尺度の中では、“**generativity**”世代継承性とですね、それから“**interests in sustainable environment**”持続的環境への関心、それから“**interests in biodiversity**”生物多様性への関心、そして“**fairness on judgment**”判断の公正性、そして“**affinity to environment**”環境親和感ですね、そして“**interests in the resolution of environment problems**”ということで環境問題解決への関心、そして“**negative attitude toward environment problems**”否定的な態度、そして第8因子として出てきたのが“**sustainable well-being**”。先ほども少しご紹介いただきましたけれども、環境や将来の世代に負担をかけないで幸福を追求することが重要である、といった様な項目ということになります。そして最後に、“**affinity to social diversity**”と。これらの側面を含むものとしてサステナブルなマインド、心性という呼び方をしているわけですが、これはどうも、私は Milfont さんの開発した **pro-environmental attitude scale** を妥当性の指標として使ったのですが、それと関連性を見てみると、ここに示したように、私の方のスケールと、それから Milfont さんのスケールの4つの因子、これは因子分析ですけれども、第1因子とそれから第3因子が私の方の因子、それから第2因子と第4因子が Milfont さんの因子という風に別れまして、それぞれ違うものをどうやら測定しているようだ。こちらが私のサステナブル、そちらが **pro-environmental attitude scale** です。そうすると、やはり少し違う側面を測定出来ているのではないかなと考えているわけです。

これはパーミッションをしていただきたいという願いもあるのですが、ぜひ先生の開発された環境アイデンティティスケールとの関連を調べてみたいという風に思うのですけれども、先生の尺度は今の中身で行くと私のサスティナブルな心性の方に関連しているのか、それとも Milfont さんの考えの方に関連しているのか、この辺りについてもお考えがあったらちょっとお聞かせいただけると幸いです。

最後に、well-being との関連、私のテーマは well-being なものですから、それと文化差を絡めながらですね、少し話をしたいと思います。先生は自然と well-being との関連について、その重要性について触れられたわけですが、環境的アイデンティティとそれから well-being の関連についてお話ししたいのですが、何か実証的なデータをお持ちでしたら簡単にその内容を教えていただければと思います。特に well-being の側面ですね、所謂 SWLS という Diener のスケールであるとか、psychological well-being という Ryff のスケールであるとか、色々なスケールがありますが、そのあたりとの関連で何かご検討の結果などがあれば教えていただければと思いました。

一方で、今日のお話を伺っていて感じた文化差というようなものに関しては、先ほど申し上げましたけれども、日本ではコミュニティ活動への参加が非常に少ないというのが一つの問題点としてあると。それからポリティカルパーティの話ですね。政党への親和、これは日本では全く駄目だと思います。全然親和性が低いというようなことですね。それから、自然への一体感、親和感、これは非常に強いのですが、それを自己認識として意識できるかどうかというところが、少し微妙だなという感じを私は持っています。自然に対してわれわれも感覚として親和感というものを持っているのですけれども、それによって自分が自然の一部であると、自分がという感覚をそこで持つかなと。そのところがやっぱり西洋のセルフがしっかりある構造と、それから日本のヘッジの曖昧ですね、そういう構造との違いのようなもので、それを自分の一部という感覚でとらえるのか、世界の大きなものの一部と捉えるのか、そのあたりの所に感覚の違いみたいなものがあって、それが日本で環境アイデンティティというものを考える上で、検討していかななくてはならない側面になるのかなという感じがしました。

こんなことを申し上げるのは、実はサスティナブルなマインドとそれからサスティナブル・ビヘイビアと、それから subjective well-being ですね、その関連について共分散構造分析による分析をやったことがあるのですが、このようにサスティナブル・マインドからサスティナブル・ビヘイビアへの関連というものは結構あります。それからサスティナブル・マインドから subjective well-being の関連性も結構あります。しかし、ビヘイビアと well-being との関連性というのはほとんどありません。これは一般的な話で、先ほどの話でいっても、所謂サスティナブルなものによって行動は出てくるし、well-being にも繋がる。しかし、行動は well-being には繋がらない。つまり、サスティナブルな行動というものは、所謂われわれの言う well-being とは関連しないという、ちょっとつらいものでもあ

るのかもしれないというようなことが示唆されたわけです。

私が言いたいのは何かというと、この well-being の操作の部分を経典的な well-being に変えます。経典的な well-being というのは、Minimalist subjective well-being という風に呼ばれているもので、その内容としては感謝であるとか、あるいは穏やかさというような側面がその中に入っているということです。これらの指標を取って、この関連性を調べてみると、サステナブル・マインドと、そのハピネスというものの関連性は非常に高くなります。0.8 にまで高まっているということで、その文化に合わせた well-being の指標というようなものを考えながらサステナブル・マインドや、サステナブル・ビヘイビア、ビヘイビアの方は相変わらず関連はありませんが、そういったものとの関連性を見ていくことが大事な側面になっていくのではないかと考えられるわけです。ここの数字を見ていただきたかったということなのですが、そのあたりで文化的な結びつきのようなものを慎重に考えていく必要があるのではないかと考えます。

一方で、文化を超えた共通点として指摘できるのは、動物園への親和感ですね。これは私も、あるいは私の女房もですね、動物が大好きでどこへ行っても動物園へ行きます。日本の中には、これはアメリカでもやられていると思いますけれども、アニマルセラピーですね、発達しているほど動物介在療法として親和性が高まるというものもあると思います。それから環境アイデンティティというものの存在も間違いなくあると思うので、4つの側面はやはり文化的に共通する部分ではないかなと感じました。また、環境アイデンティティがレジリエンスに繋がるというようなことで、コミュニティ・レジリエンスというものが非常に大事であるという同じような主張も出てくるのではないかと思います。

ただ、これまでの研究を拝見していても、コミュニティを単位とする研究みたいなものがまだ十分に行われていないのではないかと。日本でも、野上先生達の総合研究のように、そういうレベルで色々な試みを行おうというようなことがなされていることは事実だと思うのですが、まだまだ少ない。最近私どもの行っている研究テーマの一つとして、コミュニティが持っているその精神的予防、回復、成長機能、そういったものについての検討があるわけですが、そこでは3つの機能があるといわれています。それは、何か嫌なことがあった時に、それを回復する機能、これがこの機能ですね。つまり、嫌なことで落ち込んだものを回復させる機能というものがコミュニティにあると。それから、逆境に屈しないサステナビリティという、何か悪いことがあったとしても落ち込まないで自分の強さをそのまま保持できるというような側面です。そして、3つ目が逆境後の成長ということで、それを糧にしてエンパワーしていくというような側面があるだろうと。というように、今日の話の環境との関連というようなものを考える中でも、何か癒しの回復機能と、それから続けて保持できる機能と、それから成長させる機能、そういったものを色々弁別しながら、これは個人でも、コミュニティでも当てはまるものもあると思いますが、そういったことを考えていくことが大事な側面になるのではないかなと思います。

さらに、最近注目されているのは、これは大島先生の研究の領域ですけれども、社会関係資本、ソーシャル・キャピタルと呼ばれているものですね。その中にも繋がりを **bonding**、それから **bridging**、あるいは **linking** とか、そういう風に多様にですね、内容を考えていこうと。それらがいずれも疎外感とか、あるいは精神的健康と関連を持つという指摘もありますので、こういった指摘みたいなものも、やはり環境教育と結びつけながらコミュニティの強さをもたらすものというような形で検討していくべきではないかと思いますが、この点についてもお考えをお聞かせいただければ幸いです。

どうも焦点が絞れなくて非常にまとまりのないコメントということになりました。申し訳ありません。本当にご講演ありがとうございました。勉強になりました。

●司会（大島）

ありがとうございました。

少し私から言い訳をさせていただきますと、時間があれば全部英語のスライドが作れたはずなのですが、ここのところ私どもは大変忙しくてですね、スライドがほとんど日本語になっているのですけれども、時間さえあればよかったのにといいところなのですが。

申し訳ないのですが、先生の方からですね、いくつか質問があったのをもう一度整理して、このこととこのこと、というのを、質問をもう一度言葉で言うていただければと思うのですけれども。

●コメンテーター（堀毛）

スライドの方で、赤い字でといっても皆さんの方にスライドも配っていませんし、このスライドを見ていただくしかないのですが、一つはですね、この環境アイデンティティの個人差を把握することをなさっていらっしゃるのかということでございます。何か実証的なデータがあればご紹介していただければありがたいという風に思います。

それからインターベーションに関して、強い所を強めるということと、弱い所を補うというような、そういう発想みたいなものがこの環境アイデンティティ研究の中でも取り入れられていらっしゃるのかどうか。これが2番目の質問ですね。

それから3番目の質問は、私が呈示させていただいた様なこういう内容を環境アイデンティティの考え方と重ねた時に、似たようなものを測定しているのか、あるいは違う側面を考えた方がいいのか、そのあたりの関連性についてどのような感想をお持ちかと。

そして、4番目は文化差ということについていくつか指摘させていただいたわけですが、例えば中国などでもですね、研究なさっていらっしゃると思うのですが、そういう文化差についてどのような感想をお持ちでいらっしゃるのか。

そして最後は、コミュニティを単位とする研究の必要性というものについて、どうお考えか。以上

5点になるかと思います。どうぞよろしくお願い致します。

●司会（大島）

どうもありがとうございました。それでは Clayton 先生、お願いいたします。

●Susan Clayton

色々考える題材をいただきました。どうもありがとうございました。ほとんどのご質問というのが、これからやらなければいけないことと言った方に関係のある、今手持ちのデータに関係があるというよりも、これからの研究を深める対象になるかと思いました。けれども、先ほどご紹介いただいたスケールなのですが、環境アイデンティティのスケールというのは、お持ちのスケールの一部分になっているような、そんな位置づけになるかなという感想を持ちました。例えば環境への親和性であるとか、Milfont の尺度、最近のものは見ていないのですね。なので、そのあたりがどれ位同じか少し分からなかったのですが、私の EID のスケールと比べてどうかということでしたが、戦略に関してのご質問があったかと思います。個人の強い所を伸ばすべきか、それとも弱い所を補強するかというところ、これは非常に実務的で重要な点だと思います。以前、私もこの辺りを考察したことがあります。これは、行動にもよるとというのが答えになるかと思います。何らかの形で言えば、個人の強い所を強化することで活用できるということはもちろんあると思います。例えば、動物園での研究ですけれども、すでに環境問題に対して心配しているというような人達、この人達に行動しましょうという風に促すことは、元々関心を持っていない人達よりも影響をもたらすと思います。しかしながら、例えばですが、もっと幅広い社会のグループを対象にして考えた時にはどうでしょうか。例えばあまり関心がないという人達、繋がりを持っていないというような人達を考えたらどうでしょうか。そういった場合には、まずは一番最低限の所まで全員のレベルを上げるということも考えるのはいいのではないかという気もします。

それから文化差ということについて、これはとても興味深いお話だと思いました。私は、そもそもそういうような差がどこから来るのかというところを考え始めたくらいの段階でしかないのですね。もちろん直感で考えてもそこにはいろいろな変化の違いがあると思います。それが、私が今日お話しした内容とかなり結びついているところもあると思います。ただ、私たちが考えなければならないのは、われわれの持っている文化差というものが、例えば精神性だとか宗教と結びついているものもありますよね。それから、個人差であるとか手段性であるとか、そういったところとも関係があると思います。人類学者が言っていたのですが、一つ重要な側面で、文化を分けるものというのは、自分自身をどう自然と結びつけるかという、その辺りのところが文化差になってくるというような話も聞いたことがありますので、その辺を話していくとかなり大きな問題点になるかなという気がします。

それから最後のコミュニティに関しては、逆に質問があります。あまりこの辺のところには研究が進めてはいないところもありますが、環境アイデンティティというのは自分が属するコミュニティからも一部来ているという風に考えております。ですので、先生としてはコミュニティというのはどう定義されますか。先生の理論においては、コミュニティというお話をする際にはどういう定義でお話しされているのかを聞きたいのですが。

●コメンテーター（堀毛）

このきちんとした定義というようなものを行っているわけではありませんけれども、近隣家族、それから学校、教育、そういったあたりのところで、ある目的に沿って同じ活動が続ける、そういう人たちのグループといったあたりの定義になるのではないのでしょうか。もちろん、精神的なつながりを持ちつつということになります。

●Susan Clayton

つまり、その集団として、例えばエコシステムのように、お互いに頼りあい、そしてインタラクションがあるというようなグループですね。一つ、非常に小規模ですが研究はしたことがあります。そのコミュニティの側面に関する研究だったのですけれども、動物園に来る人ではなく、動物園で働いている人達、例えばボランティアの人達で、来る方と色々と交流する人達、そういう人たちに、どういう風にお互いの関わりを持っていますか、それがどのように時間を経るごとに変わってきましたか、ということを知りました。そもそもボランティアになるということは、皆動物好きだから立候補したわけなのですけれども、ボランティアになった後、時間を過ごして、更に周りの人たちと続けていくことによってより環境を保護したい、環境アイデンティティの度合いというものが強くなったということが分かりました。数十人という非常に小さいグループが対象だったのですけれども、これがまた大きなコミュニティでも同じようなことが起こるかもしれませんよね。

●コメンテーター（堀毛）

どうもありがとうございました。

●司会(大島)

よろしいですか、今のコメントに堀毛先生は。

それではですね、色々な話題が出ておりますので、少しフロアの皆さんから何か気楽に疑問に思ったことや考えたことを言っていただければと思うのですが、いかがでしょうか。

●質問者 A

日本語をお願いします。私、柿本と申します。専門は社会的アイデンティティの理論を通して、集団行動についての研究なのですが、配慮行動についてここ数年、研究のセッティング上関心を持ってやっています、まさに Clayton 先生のご報告がぴったり当てはまったので楽しく聞かせてもらいました。

その専門と少しずれる話ですけれども、面白いと思ったのは、動物園を訪れる人たちが、環境問題に関心を持って取り組まれるという結果ですね。論理的に必ずしも繋がるわけではないのに、何故かそうになってしまうという所がすごく面白いと思いました。可愛いし楽しいし、私も子供たちと一緒に行ったりするのが好きなのですが、それは必ずしも環境とつながるとは限らなくて、動物の種類とかにもよって、例えばものすごく微細な微生物を好きな人が環境問題に関心があるかということ、そうでもないはずなので、動物園にいるような類の動物が何か関係があるのかなということが一つです。地球全体に思いを馳せるだとか、そういう所に繋がるのかなと思いました。これはコメントです。不思議だなと思ったことで。

一つ質問ですけれども、私自身の研究で、仮想世界ゲームというものを使っているのですが、その中で、地域へのアイデンティティ、同一視一体感が環境配慮行動を促進するかどうかということを調べたものがあつたのですけれども、そこでは、何種類かバージョンがあつて、ある場合、特に電子的にやった時には、必ずしも地域に一体感を持っているということが環境配慮行動の促進に関連がなかったのです。その時に私自身が考えたのは、少しはコミュニティの話とも関係すると思うのですけれども、どの範囲でコミュニティや環境を考えるのかと思ったのですね。自分の住んでいる、あるいは身近な地域に一体感を感じている場合は、自分の身近な地域の環境には関心があると。野上先生の研究は琵琶湖のコミュニティとの一体感が、琵琶湖の水質保全に繋がったという結果だったのですけれども、それは必ずしも地球全体の問題、温暖化の問題とどう関わるかだとか、そういったことに關しては少し怪しく、分からないのですね。私の研究だと、地域に関心があるからといって世界全体を何とかしようという風にならなかったのは、そのギャップ、どの範囲で自分が環境を考えるか。実際、地球全体の環境や、例えば大陸レベルの環境と、身近な市町村レベル、あるいは町内会レベルの環境では、利益が相反する場合もある、対立する場合もあると思うのですね。その辺りを、どのように構想されているのでしょうか。地球の大きさと、コミュニティも色々ありますし。環境アイデンティティの発想は、地球全体なのか、あるいはローカルな、ご発表の中にもありましたけれども、身近な森とか、住んでいる地域のようなものもあつたと思うのですけれども、サイズはどういう風に考えられているのかというのが質問です。以上でございます。

●Susan Clayton

ご質問ありがとうございます。まず私が言えることは、この環境アイデンティティについて考え

始めた時に、非常にソーシャル・アイデンティティについての取り組みからインスピレーションを受けました。ですので、グループのアイデンティティと似たような考え方を適用できているのだですね。

そして、最後にいただいたご質問にまずお答えしたいのですが、環境アイデンティティというのは、地球規模であると思います。ある特定の地域や場所に結びついているわけではないです。他の研究では、例えば場所のアイデンティティに集中して、どの位の結びつき、依存というのが特定の場所にあるのかということについての研究や、ナショナル・アイデンティティについての研究もしました。ある特定のコミュニティについてのアイデンティティの評価、測定を行っています。こういったものは、それぞれが拡大された自己意識を促進するという意味では恐らく関連していると思います。ですので、自分自身を超えた単位で物事を考えるという傾向を誘導すると思います。しかしながら、それが繋がっている程度というのは多様だと思います。というのも、その地域ごとの規範というのものもあるでしょうし、固有の規範というのものもあるでしょうから。一般的にアイデンティティといった場合には、行動の前に先だって存在するものだと思います。そして、姿勢あるいは態度の前に来るものだとも思っています。ですので、このアイデンティティがあれば守護的なあるいは環境的な行動を誘導する。しかしながら、必ずしもそうなるとは限らないということになってくると思います。ですので、これを素因として活性化したり、あるいは方向性を誘導したりできるものであると思います。ある傾向として、自分自身のことを環境の一部として考えがちな人というのは、もしかすると、自分が取り組んでいる行動について考えを来さなかったとしても、例えば誰かが環境を破壊したということになったら、環境のアイデンティティが高い人たちは、そうでない人たちに比べてより強く反応しやすいということはあると思います。

もう一つ、動物園のことも言っていました。それが環境的な心性を奨励するのかということなのですが、必ずしもそこは結びついていないと思います。特に、多くの動物園では何か物を買うことを奨励したり、本来必要ないものを買うように求めたり、楽しみ、快楽であるとかそういったことをどちらかというと奨励するので、動物園は環境のメッセージを提示しようとするのですが、そうしたいけれども必ずしもそうはならない、伝達したメッセージが伝わりにくいということもあると思います。

●司会（大島）

どうぞマイクで、自由にお話しいただいて構いません。

●質問者 A

ありがとうございました。環境アイデンティティが環境行動を促す基礎的なレベルになっていると

というようなお話で、多分それは地球レベルで環境問題を想定されているのだなと分かりました。面白いのは、ローカルな地域や、あるいはもう少し小さい集団へのアイデンティティほど、般化して自然の繋がりみたいなのがあるのだらうなと思える。例えば、地球が壊れると地域も壊れるのだからみたいな、そういう論理的な思考になるはずなのに、私の研究では繋がるのだけれども、別の研究では繋がらないみたいなの、それがちょっとわからない。どのような規範があるかだとか、そういう問題が絡んで出てくるのだらうなと先生の答えを聞いて感じました。

それと、すみません動物園についてもう一言、お答えいただいたので追加で感じたことを述べますと、先生はものすごい数の動物園で調査されたようですけれども、お話を聞いていて思ったのは、自然史博物館だとかはどうなのかなって。つまり、動物は身近な、生きているものですが、生きているものではないにしても、地球全体に思いを馳せることのできるような場として、博物館というものもあって、実際に動物園の機能の一つはそういうところもあるのではないかと思います。生きているということが大事な側面もあるのでしょうけれども、地球全体に思いを馳せるには博物館というのも一つかなと少し思ったので。私、実は博物館も好きなのです。それで、そういうことも思いました。単なる感想です。ありがとうございました。

●司会（大島）

コメントはありますか？

●Susan Clayton

そうですね、博物館も動物と同じような動機というものを持てると思います。つまり、自然保護ということに関してのメッセージを発することができる場だと思います。そして、いくつか動物園と同じような良い点もあります。そこに行くときは、博物館もグループ単位でみなさん恐らく行きますよね。そして、そこで色々な興味を持てる部分について学ぶとか。ただ、動物園ほどビビッドな、迫力があるだとかそういう感じの体験とは毛色が違うかもしれませんが、私たちが使える機会はみんな使うべきだと思います。

●司会（大島）

はい、なかなか面白いポイントだったと思うのですが、今の内容に関連することでもいいですし、全く別の視点でも結構ですので、またどなたかありますでしょうか。どうぞ気楽に。これ位の規模のセミナーですので、気楽に何かありましたらご発言よろしく願いいたします。

●質問者 B

素晴らしいプレゼンをありがとうございました。片山美由紀と申します。東洋大学の教授をしてお

ります。

20年か、30年ほど昔の話になると思いますけれども、私一人旅でケニアやタンザニアに行ったことがあります。その時国立公園にも行きました。

ご講演で、関心の中心点が **well-being**、それからアイデンティティだという話だったのですが、その二つの関係を作るメカニズムというのがごく難しいなという風に思っております。というのは、その差がそれぞれすごく小さいからです。

一つコメントしたかったのは、この分野において、もし研究者がこの変数に頼らなければならない場合、例えばその環境保護の行為といった場合には、モラルに関するプレッシャーだとか、要望だとか規範とか、そういうものも入れなければならないのでしょうか。例えば、人はどこに住むのかということを選択できます。一軒家に住むだとか、マンションに住むだとか、アパートに住むかとか、自由に選択できます。その場合はモラル的なプレッシャーは全くないか、あったとしてもものすごく小さいと思うのです。例えば、少し不便な場所にはあるけれども、自然の豊かなところに建っている所とか、すごく便利なところにあるけれども、自然が全くないような都心であるとか、例えば五つ星のホテルが都心ではなくだいぶ離れた郊外だけでも自然が豊かなところに建っているだとか、でもそういうのはとても不便ですよ。行き来はタクシーだとかハイヤーになってしまいます。ですから、この変数としてのライフステージというものがあると思います。例えば家族の構成であるとか、子供の年齢であるとか、または仕事におけるストレスであるとか、仕事のストレスからの回復力といったことを考えた時に、ストレスが高ければ高いほどそういったストレスのある人は、ストレスから回復する力が強くなければ大変です。先生のようなところでは、長期の休暇を取られるというようなこともあると思います。ILO132 というような法律もあります。例えば2週間の休暇を取らなければならないとか。休暇の長さでいえば、アメリカは世界で2番目の長さの休暇を取っていますが、東アジアの国々では、なかなか長い休暇を取ることが難しい状況があります。そう考えると、労働法というのが、自然と **well-being** やアイデンティティとの繋がりや成熟度に関連しているのではないかと思います。そのような感覚というのはあるものなののでしょうか。そういう社会の周りを取り巻く環境であるとか、その他の変数として、子供時代に置かれた環境だとか、よくご存知だと思います。そういうコメントです。

●Susan Clayton

ありがとうございました。色々面白いお話をしていただきましたが、その中でもとても重要だと思いましたが、自然の中でそういった回復に繋がるような経験が持てない人のことだと思います。社会としては、認識としてこういったことがどれだけ重要なのか、つまりそういったことを体験する機会を人々が持つことが重要なのかという認識がなければならないと思います。私はその点であり

楽観視してはいないのですが。

●質問者 B

介入プログラムを開発するのならば、セグメントを設けてやられるのがいいと思います。私の言っていることがお分かりいただけますでしょうか。

●Susan Clayton

はい、とても重要な問題提起があったと思います。私たちがフォーカスしているのは、個人の福祉なのか、あるいは環境の福祉なのかということです。願わくは、多くの場合はこれらに相関があると思いたいのですが、必ずしもそうはならないと思います。ですから、もしかすると人は回復の経験というものが、この長い距離を走って、そして大きな未開拓地において自分の家を建てるということでありますが、個人の福祉あるいは幸福は高まっても、環境の福祉は落ちるということがあると思うのです。なので、インターベンションを考えるときには、環境の福祉を重視して考えているのですけれども、もしかするともっと個人の福祉や幸福、それから環境の **well-being** との繋がりを考えて、二本立てで両方を考慮していかなければならないと思うに至りました。

●司会（大島）

他にいかがでしょうか。どのような視点でも構いませんけれども。

●質問者 C

ご講演ありがとうございました。TIEPh の研究支援者、アシスタントをしております、大久保と申します。

私が聞きたい点はですね、環境アイデンティティとアニミズムについての関係なのです。というのも、日本では、日本に限らず東洋の世界であることなのですが、色々な自然物に、まるで人のように魂が宿るという考え方が世界中でもありますけれども、特に東洋にはあるという風なことがあります。特に日本においても、鳥獣人物戯画、ちょっとこれは訳しにくいところですが、動物が人の魂を持って、人のように振る舞うだとか、そういったもの、今の日本のキャラクターにも繋がるようなところですが、これは、所謂先生がおっしゃっている環境アイデンティティということにおいて、人と自然とのコネクションの概念の中で考えることは可能なのではないかということです。つまり、先生がおっしゃっていた環境アイデンティティという概念は、自己が自然とコネクトしていく、その方向性を強調しておられたように感じましたけれども、ある意味アニミズムといったものは、自然の方を人間の方に近づけるような形で、方向性が若干異なるようにも感じるのですけれども、その点についてどのようにお考えなのか聞かせてもらえればと思います。

●Susan Clayton

とても興味深い点であったと思います。人の動物についての考え方というのは色々と複雑で多岐にわたっていると思います。日本に関しても然りであり、またアメリカでもそうだと思うのですが、ペットがすごく好きで、しかしながら、ペットは小さい人みたいに扱っている傾向があります。ですので、この人たちが自然のことを考えたり、自然との強い結びつきを強化しているとは思いません。ペットを通じてそういったことをしているというよりは、おっしゃったように、動物を自然界から離して人間に近いところに置いていると考えられると。ということは、動物の自然との繋がりを少なくするということなのですが、これについての研究ということで、アニミズムと自然に対する姿勢や関係性をみたり、自己の意識との関係性についてみたりといった研究はあまり知りません。おそらく環境アイデンティティと相関があるという風には思っています。というのも、自己と他の動物種との間のバリアを低くするという能力によって、その境界線を越えることができるのだと。人になったりあるいは他の人になったりすることも出来るのだと。あるいは動物的な人間になったりだとか。ネイティブな原始住民といったところもそうだと思うのですが、他の動物の上位ではないとみなすことが環境アイデンティティにおいては重要だと思うので、肯定的な正の相関があると思うのですが、時として動物が人みたいになり過ぎていて、動物ではなくなっているというようなケースもあると思います。

●質問者 C

ありがとうございます。

●司会（大島）

他はいかがでしょうか。せっかくの機会ですので。同じ方でも構いませんがいかがでしょうか。

●質問者 A

またすみません。途中で紹介された、中国とトルコとアメリカにおける環境アイデンティティとナショナル・アイデンティティの関係についてのデータで、少し意外に思ったのですが、トルコと中国ではナショナル・アイデンティティと環境アイデンティティの正の相関がそれなりにあったようですが、中国というのは、私は何回かしが行ったことがないのですが、開発し尽くされていて、自然が残っていないというか、人がたくさん住んでいるところはかなり人工的な場所に、それは何十年も前から、古くから開墾されている感じがしたので、それを中国の人たちが環境との関わりをナショナル・アイデンティティと絡められているのが意外な感じがしたのです。どういうメカニズムなのだろうかと思いました。日本人が国土を保全するとなると、日本は美しい国だというのは直感的

に分かるのですけれども、中国の人はそういう風に思っていないのではないかなと少し思ったので。開発し尽くされているというところですね、そこが少し引っかかるのですけれども、何か説明の論理はあるのでしょうか。

●Susan Clayton

おっしゃっていることは確かにその通りだと思います。中国の方は、あまり考えずにごみを捨てるだとかそういうこともありますし、動物を扱うということも、あまり動物を尊重するとかそういうようなことはありませんが、先ほどの相関というのは、だからといって環境アイデンティティが高いですというわけではありません。環境に関する関心は低いと言わざるを得ないかもしれません。ただ、研究の中で、詳細は忘れてしまったのですけれども、環境に対する態度を予測するものというのが、中国とアメリカでは違うのです。もちろん、私たちは自然の一部なのだから自然を使って当たり前だと、そういった考えはあると思います。色々な理由があってそうなっているのですけれども、まず中国の人たちは、これから生き残るために経済をとにかく強くしなくてはならないというところに、社会主義的な考えからか、強くそういう思いがあるのだと思います。この辺りはもう少し研究を進めるべき分野ではないかなと思います。

●司会（大島）

はい、ありがとうございました。よろしいですか。あとはいかがでしょうか。

一応5時までの予定でしたので、すでに過ぎていきますので、もしご質問が無ければ終わりにしたいと思います。

最初に申し上げたのですけれども、コンサベーションという言葉から、文化差というのが色々な面で出ているなということを今のディスカッションを聞きながら思いました。今日のお話、特にアイデンティティあるいはセルフといったものが、恐らくアメリカでご研究なさっているのと、われわれが日本で感じるものとの微妙な違いというものがあるのかなというようなことを感じていました。これからぜひとも、もう少しコンタクトを取りながらわれわれの研究をみていただき、堀毛先生もそのようなアプローチをなさったのですけれども、コメントをいただき、それからまた先生の研究をご発表いただいてディスカッションをするという、そういう機会ができればいいなという風に、非常に強く思いました。

今日は本当にいいお話をありがとうございました。Clayton 先生にもう一度拍手をお願いいたします。

それでは、セミナーの方はこれで終わりにさせていただきます。どうもありがとうございました。